



第3号

『設立30周年特集号』

発行所

坂田郡近江町飯12-3

天の川沿岸土地改良区

☎(0749) 52-0067(代)



地域開発のセンター土地改良区事務所(S57.12.20新築)

おかげさまで満三十年

皆さまと共にあゆむ天の川沿岸土地改良区



30年の歴史を秘める
旧事務所看板



つわものどもの夢のあと
今はなき旧事務所(S 59.9.10 解体前に写す)



ご挨拶

理事長 日比繁一

昭和二十九年十月一日、天の川沿岸土地改良区が誕生し、発足以来早くも満三十周年を迎えました。

かえりみずと、改良区の歩みは私たち地域の農業史上、かつてない足跡を残したと言えます。

公地公民・班田収授と言われた時代に条里制が施行され、現在の整った区画の農地が造成されてから、凡そ千余年が過ぎました。

その間において天の川には二十余の井堰が設けられて、これで農業基盤も用水も一部を除いては、まづまづと安堵されていたようでありませぬ。

しかしながら時代の変遷によって、利水については近代的に改革する必要に迫られ、二十六年開発計画が樹立されましたが、計画のみで、その機熟さずという状態が二年ほど経過したとき、二十八年突如として来襲した十三号台風によりほとんどの井堰は決壊流失したのであります。この大災害を契機として、二十九年四月一日天の川・丹生川両合同井堰の建設が決定、着工となり、当時の米原町・醒ヶ井村・息郷村・息長村・坂田村の約九千反の受益地域で当土地改良区が十月一日発足となりました。

それ以来、琵琶湖からの逆水・右岸左岸の幹線支線水路の新設事業等、関係者のご努力により次々と立派に完成されましたが、又もや三十四年に伊勢湾台風の直撃を受け、天の川・丹生川共に未曾有の大被害を蒙ったのであります。

幸い関係機関のご努力により、二十億円という巨費を投じて根本的な河川の大改修が施行され、順次完成し利水関係としては、夏目井堰より下流湖岸までに十一ヶ所の床止帯工、落差工等が設置され、完全な井堰が設けられる等、幾多の大事業が行われ、以後その維持管理と施設の充実に努めてきたのであります。

このような尊い歴史の中で、昭和三十年頃からわが国の経済成長は目覚しくなり、そのため稲作技術も大幅にかわり、今はトラクターや、コンバイン・田植機・自動車等が農地を走り廻るようになりました。

一方、国・県においては高度経済成長の過程にあって、その人手不足、国民への食糧の安定供給等を勘案して、ほ場整備をはじめ農業改善にも多額の補助政策をされ

る等、優良農地の造成に力点をかけられることになりました。また、琵琶湖は近畿千三百万人の水がめといわれる重要な位置付けとなり、国では琵琶湖総合開発という私たちの想像もしなかった、大事業が計画され、関連してその補償事業等が突出するなど、今や当改良区受益地も大改革を迫られ、既に事業に入っている現状であり、かん排ほ場整備の総事業費は東部地区を含め実に約百億円であります。



改良区設立三十周年を祝して

昭和二十九年当時、合同井堰を始め天の川沿岸災害復旧工事、更には逆水工事等々幾多の諸工事に取り組みながら現在の米原・近江両町地域に関する利水に努力されてきた土地改良区が、既に創設以来三十周年を迎えましたが、その記念特集号を発刊されるにあたり、紙上失礼ながら今日までの改良区運営に関係されました数多くの方々に深甚の敬意と感謝の意を表する次第であります。

近江町長 前川善彦

川は各所が堤防決壊、ために農地への土砂流入、人家への浸水など惨たんたる被害を蒙りました。この災害復旧工事もたいへんで、県営事業として約五年間もかかり、ようやく現在の天の川沿岸のように改修されたわけですが、当時の写真などを見ますと、天災とは本当に恐ろしいものだとつくづく思いますと同時に、その後の諸工事等で農家負担が長期にわたってはおりますが、改修前に比べれば随分平和な、豊かな営農生活が出来ているものだ、当時の関係者のご苦労に対し頭の下がる思いで一杯であります。

この努力により幾多の事蹟を残し、茲に記念すべき三十周年を迎え、したことは誠に喜ばしく、深く感謝申し上げる次第であります。三十周年を迎えるにあたり、私たち役員一同この重大時期を再認識し、心を新たに受給者各位のご指導ご協力を得ながら、その使命と責務を全うするため、最大の努力をする覚悟であります。このときにあたり、三十周年を記念して今日までの歩みの跡を辿り、先輩諸氏の偉業を忍び誠にお粗末ではありますが、特集号を発刊し、

このような変遷を経た改良区は、いままた、かん排事業・ほ場整備事業と、従来の天の川関係維持管理を主体とした業務から大きく飛躍して、いうならば改良区としての本質的な土地改良事業でありますかん排・ほ場整備事業に取り組み新しい時代に入ったわけでありませぬ。



県営天の川災害復旧事業起工式 醒ヶ井小学校にて(S29.10.20)

両町の関係地域の将来構想に基づく営農の大改革ですから、完成までは容易なことではありませぬが、二十一世紀を迎えるにあたり、後顧の憂いのない農業基盤の確立のために、農業者と共に一致協力して、目的を達成されるように期待し、三十周年記念を祝しての一言といたします。

永く後世に残すとともに、明日への資に供したいと存じます。おわりに皆様の一層のご指導ご協力をお願い申し上げます。



改良区設立三十周年によせて

米原町長 山川 茂

天の川沿岸土地改良区が設立されて、三十年の歳月が過ぎたといふことは誠に感慨無量なものがあ

つたと記憶しております。昭和四十七年、琵琶湖総合開発特別措置法の制定に伴い、新しく

いた昭和二十八年の台風十三号、町村合併後の昭和三十四年の伊勢湾台風

の川利水計画があつたこともあり、十三号台風の被害によりこれを機として二十九年天の川沿岸土地改良区が設立され、三十九年に亘つて災害復旧事業による頭首工、下

今日、両事業が着手され将来の営農の姿を思い出すとき改良区の仕事の重大さを痛感するとともに、町としての責務も感ずるものであります。よき事業を子孫に残すべく今後の活躍を期待して、三十年記念特集号のご挨拶といたします。

つ思いが致します。十三号台風時における井堰のほとんどが潰滅状態となり、伊勢湾台風による堤防が各所で寸断されて田畑の埋没があり、股までつか

対策もでき、漸く態形が整つたと思われました。その間の改良区の財政的な問題もふまえ、役員の皆様御苦労はたいへんなものであ

りません。よき事業を子孫に残すべく今後の活躍を期待して、三十年記念特集号のご挨拶といたします。



県営事務所開きに看板をかける
内藤県耕地課長と吉井所長
(S29.11.21)



環境整備を求めて

代表監事 粕 淵 光 夫

農業を取りまく内外の厳しい諸情勢に対処するためにも、土地利用型農業の生産性向上を中心とする構造改善策により将来にかけ

の整備を進め、農村としての連帯感の醸成と、農村としての生活環境整備も、土地・水利用・道路と連動的に、徒らに行政に頼りたらずに住民自らが知的発創力を活かして、積極的な豊かな村づくりを確立すべきでしょう。

ない。また、これを生産している食糧の原点にかえて位置づけの責任ある農業者としての配慮を強く認識して、土地を原資とした種々な運用の事業があり、それらの事業を適切に利用して、農村の将来に向って悔いのない前進あるのみと信じ、今日改良区も三十歳を迎えて、いよいよ伝統と栄光にまた涙もあつたことでしょう。あとに続く組合員の皆さん役員は一段と英知を凝集して有機的な一致協力の強化を図るべきを痛感いたし記念号に寄せます。



被災当時の丹生川



現在の本田井

十三号台風の水害により流失した本田井の今昔



天の川開発の思い出

愛知川沿岸土地改良区顧問 吉井 勤

天の川沿岸土地改良区は、このたびめでたく三十周年を迎えられ「天の川土地改良区だより」記念特集号を企画発刊されるにあたり、私にも何か思い出を、執筆方の依頼を受けたのは八月も終りに近い頃でした。

ちょうどその時、台湾にて第二回「東アジアの水と農業」のテーマで国際シンポジウムが八月二十七日から一週間開催されることになっており、私が提出していた愛知川ダム水利管理の事例の論文が採択されたので、その準備や渡台のために追われていました時です。

こんな事情もあり、又過去の資料も全く持ち合わせがなく、記念特集号としての御期待に沿い得ないのでお断りしようと思つたが、私にとって懐かしい思い出の事業でもありお引き受けした次第であります。

帰国して旅装を解いて、いざ筆をとってみると教字的記憶などが全く定かでないで、思いのままを綴ることにしますが御容赦賜りたい。思えば昭和二十八年の台風水害で天の川本流および丹生支流の各井堰が流出したのでこれが復

旧工事を急ぐことになり、この事業を私が担当することになりました。

この井堰復旧にあたって、当時隣接の姉川合同井堰は災害の域を超えた改良事業としての見方が強かったため、早速会計検査院の事前査定検査を受けることになった。



県営天の川災害復旧事業起工式にて
計画説明の吉井所長(S29.10.20)

したがって、災害復旧の基本にもとづいて各井堰個々の現地査定は大変厳しいものがあり、指摘事項も数多く提起された。そこで私は早速これらの指摘事項の回答を携えて次の査定地である京都へ夜遅く了解を求めるため、検査官を訪ねたことも忘れ難い思い出である。

また、従来河川の上下流の井堰間には不文律の厳しい水利慣習によって利水がなされていたが、井堰統合によって旧井堰の復旧は自費によらざるを得ないし、反復利水も出来ない、そこで、従来の各井堰位置には床止堰提の設置を、土木部に要請実現するとともに合同井堰からの連絡水路でこれらの取水口をつなぎ、その目的を達し得たことも嬉しい思い出である。

また、天の川沿岸地域の灌漑用水は従来から不足していたので、その不足分を下流域に皺寄して琵琶湖揚水によって補給する計画を樹て、県営事業にするための基準および採択について苦労したこととも思い出深い。合同井堰設置にあたっては、その上流地域が従来よりさらに堪水が増大するとの反対声明の提起を受けて、これが対策案を提示しながら夜を徹して交渉したこともあった。

当時従来の水利慣行を一変して、新しい水利秩序を形成することは至難なことであった。それも確たる水源があれば問題ではないが、でなければ経費負担もかさむことであり容易ではなかった。しかし、当地域は将来の発展と

希望に燃え、地域住民の啓発等に對し何時も行動を共にし、協力いただいた元世森町長さんのお力添えと、地域農家の理解協力の結果が当時描いた理想の一端が実現したと今さら思いを新たにしている。歴史は一瞬の停滞もなくつづられてゆくが、個人の利害に直結し最も困難とされているほ場整備等、



雑

このたび、天の川沿岸土地改良区が設立され、その三十周年を迎えられます。心からお喜び申し上げます。

さて、かく申しあげる私も、設立当時の仕事に県の一技術者として従事させていただいたので大変懐しく思い出されるものがあります。当時わが国は、戦後の混乱期から漸く立ち直り、食糧事情も好転した社会情勢ではありましたが、県下では相次ぐ降雨による大災害も発生した時代でした。当天の川水系も、昭和二十八年九月に襲来した第十三号台風により、既存の井堰(木枕・土俵・蛇籠等で河川を堰止め田用水を取水する施設)がほとんど流出して取水不可能となりました。

この復旧工事として、コンクリートの合同井堰二ヶ所(天の川と

現在鋭意推進させられているが先人たちの築かれた開発の歴史も時おり思い浮べながら、さらに益々貴改良区の御発展を祈念して擱筆します。

【注】筆者は、改良区発足のいしづえである県営天の川沿岸災害復旧事務所の初代所長。

感

県職員 荒尾省吾

丹生川に各一ヶ所)と、各井堰間の連絡水路延長約十一、一キロメートルを二十九年度から三十一年度までの三ヶ年にわたって、約一億三千万円の費用をかけて実施されたのであります。当時、関係地域の概ね九百餘に係わる皆さん方の用水取水に対する心配も大変なもので、これを機にこの災害復旧事業の完遂と、更には将来の用水対策事業も併せ行うことで土地改良区の設立がなされたのであります。私も当時、母校の長浜農高の教員から県職員に転職してはじめての現場を担当させていただき、昭和二十九年に当時の醒ヶ井村に設置されました。天の川沿岸災害復旧事務所では吉井所長をはじめ、田中主事、増田技師、来本技師の諸先輩の指導の下、現地調査・測量・設計・現場監督等、微力なが



合同井堰の取水樋門・排砂樋門完成 (S 30.11)

若いエネルギーを発散させてい
ました。
セメントは直営支給で、その都
度倉庫から出し入れし大型トラッ
クも配備されていました。ある時
は、石灰工場内を通る三面張りの
水路工事で人夫さん不足のため
我々事務所職員も出役し、パイ
スで骨材を運び、鉄板の上でコン
クリートを手練りして打設したこ
ともあり、また、被災した各井堰
の取水量を、設計上万全を期すた
め毎日現地調査に出歩いたこと
も思い出されます。



左岸取入れのため右岸側へ送水用の
パイプを堰体の下部に埋設 (S31.1)

になり、取水塔・ポンプ場・送水
管のルート等、学生アルバイトを
使いながら測量したことが目に浮
んできます。
それから今日まで、早くも三十
年が経ちましたが、当時の国家財
政は「一兆円予算」であり、今日
のそれは「五十兆円予算」となっ
ています。また、農業土木という
公共事業は、当時の点線の事業か
ら今日は、面、さらには空間を考
える時代になっていきます。
今後とも、天の川沿岸土地改良
区域が、我々のふるさとである農村
地域の指導的組織としてますます
発展されますよう願っています。



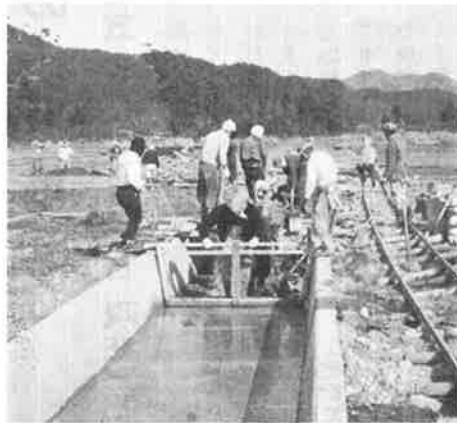
改良区で二十八年

事務局次長 藤本順孝

私が多賀町にあった県営片川事
業所から、この天の川土地改良区
に奉職して早や、二十八年を過ぎ、
年月の経過する早やさをひしひし
と感じます。
その当時の改良区は、宇賀野の
坂田診療所裏にあつて職員は四名
で、近江町役場戸籍係の方と一緒に
にいました。昼は太陽による(日
光写真)、凶面焼きと、現場での監
督、夜になるともっぱら設計とい
った具合で、昼夜関係なく仕事を
したものです。夜遅くなると眠く
なり相撲をとって隣の人に迷惑を
かけたことなど、思い出されます。
私が改良区にお世話になったの
が、昭和三十一年四月であり、県
営事業では天の川合同井堰が完成
間近であり、団体営事業の水路工
事がはじまった時でした。その場
所は、近江町役場の東で顔戸井幹
線水路の工事中でありました。現
場では、手練りでのコンクリート
打ち、パイプレーターもなかった
ので搦固めの監督、スランプテス
ト等もやってきました。今思い出
す時、二十歳の頃に毎年一路線づ
つ受けもつて設計から現場の丁張
監督をして通水テストに水が満々
と流れてホッとしたことを昨日の

ように思います。今では、設計は
専門業者(コンサルタント)に委
託し、工事を実施する時の丁張は
請負業者がやり、確認をするだけ
で、もっぱら吾々
はそれまでの段取
役、いわゆる組合
員の皆さんとの話
し合い、また現在
では県営事業であ
りますので、県と
地元のパイプ役が
改良区の仕事であ
り、ほ場整備とも
なれば、換地業務
も加わり地元役員
の皆さんと真剣に
取り組んでいるの
が現在であります。
今回、改良区の
三十周年の記念す
べき年であり、気
持ちは新たにす
っております。長く改
良区にお世話にな
っていると、理事
の皆さんの中には
親子のつき合いに
なっています。時
代はずいぶん変り

顔戸井幹線水路(現双葉中学校前附近)



工事中 (S31.4)



現在

ましたが、事務所も新しくなり、
職員の数も三倍の十一名となつて
おります。
今取り組んでいる、かん排事業
または、ほ場整備事業に今までの
経験を生かしてがんばっていくこ
とを申し上げ筆をとじます。
終りまで読んでいただき誠に有
難うございました。

天の川はその源を伊吹山に発し、姉川の一部と共に山東平野を潤し、霊仙山より発する諸流を併せ、河南の平野を貫流して琵琶湖に注いでいる。

その沿線は古くより開けていたことは史蹟などにより明らかである。降って彦根播に属する

革

沿

に及んで、井伊氏がその開発に努力せられたことは古文書などによつて窺い知ることが出来る。殊に天の川のかすみ堤の築堤法は井伊氏の方策であつたと伝えられている。

以来明治に至つても利排水共によく旧慣が守られて

天の川には絶えて水争がなかつたことは、沿岸住民の誇りとされていたのである。

これはもとより水量の豊富と、特殊河床による反覆利用堰があつたためであると考えられる。しかしながら、大東亜戦争時代の上流水源地の山林の濫伐により保水力が極端に低下し、逆に洪水は増大

するなど、利水・治水とも根本的な見直しに迫られ、湖北総合開発事業の一環として改修計画が樹られたが、実施には至らなかつた。

その矢先、十三号台風の大害害にあい各井堰は潰滅状態となるに至り、これを契機に丹生川および天の川の合同井堰、琵琶湖逆水などの事業実施に踏み切ることができ、ここに米原町外四ヶ村約九、〇〇〇反の区域を受益地とする天の川沿岸土地改良区が、昭和二十九年十月一日に発足したのである。

その後、伊勢湾台風の襲来もあつて、天の川は根本的な大改修がなされ、また、末端水路の整備など種々方策を講じ、地区内用水の配分に努めてきた。しかしながら、賦課金の徴収がふるわず昭和三十七年に財政再建整備団体の指定を受け、翌三十八年には強制徴収も実施したこともあり、残念ながらこれも歴史の一コマとして書きとどめざるを得ない。

その後は、お蔭をもつて順調な足取りで推移してきたが、時代の変遷により営農形態も大巾にかわり、また、琵琶湖総合開発も関連して、今や改良区工事もは場整備や、かん排事業などにも取り組まますます発展の一途をたどっています。

土地改良区の概要

(昭和五十九年十月一日現在)

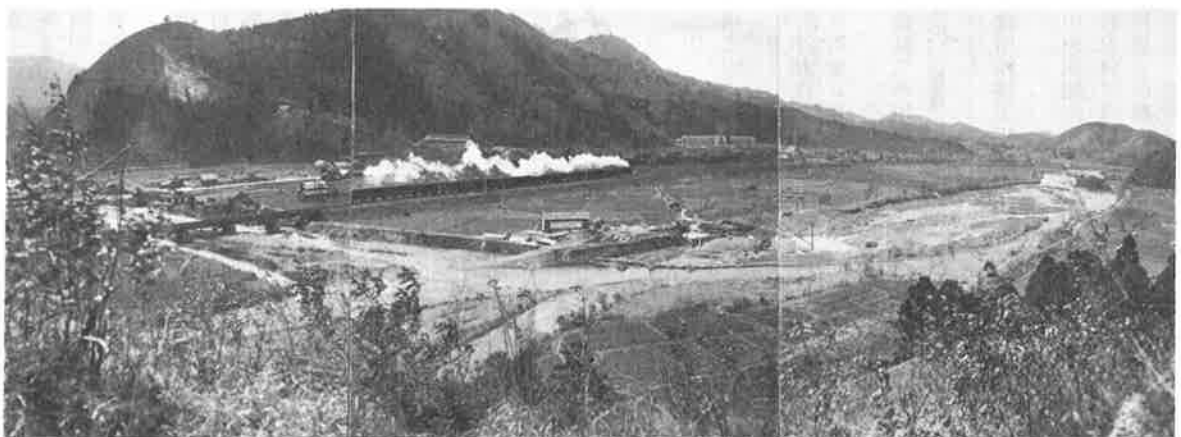
名称	天の川沿岸土地改良区
所在地	滋賀県坂田郡近江町飯十二番地三
代表者	理事長 日比繁一
設立認可	昭和二十九年十月一日 (第一一六号)
地域	近江町・米原町 普通地区 七九八 <small>ヘクタール</small> かん排地区 七七九 <small>ヘクタール</small>
受益地積	
組合員数	一、九九一名
役員数	理事 二十四名 二十九名 (監事 五名)
職員数	十一名 (内臨時職員三名)
主な事業	土地改良施設の維持管理ならびに 改修・整備
主な施設	一、用水路 ○天の川左岸幹線水路 九、三〇五・七九 <small>ヘクタール</small> ○天の川右岸幹線水路 六、九四九・七七 <small>ヘクタール</small> ○丹生川左岸幹線水路 一、七七三・一五 <small>ヘクタール</small> ○丹生川右岸幹線水路 一、四四二・六〇 <small>ヘクタール</small> ○末端用水路 (団体管二五路線、県管三九路線) 三五、七二四・三一 <small>ヘクタール</small>
二、揚水機場	○天の川下流部揚水機場他十九ヶ所
三、取水樋門	○天の川合同井堰取水樋門他十ヶ所 ○丹生川合同井堰取水樋門他一ヶ所 ○土川自動転倒井堰 二ヶ所
四、土地建物	○事務所敷地 一、三〇〇平方 <small>メートル</small> ○建物設備 二七三平方 <small>メートル</small> 事務所棟 一階 五五・九平方 <small>メートル</small> 二階 五五・九平方 <small>メートル</small> 附属棟 一階 五五・九平方 <small>メートル</small> 二階 五五・九平方 <small>メートル</small> 自転車置場 九・八平方 <small>メートル</small>
実施中の事業	一、県管かんがい排水事業 総事業費 三十七億六千六百八十八万円 工期 昭和五十五年～六十五年(予定)
二、県管ほ場整備事業 天の川西部地区 総事業費 二十二億五十六万円 工期 昭和五十七年～六十五年(予定)	
天の川西部地区 総事業費 二十二億七千三百七十万円 工期 昭和五十八年～六十五年(予定)	
三、県管農業用河川工作物応急対策事業 天の川合同地区 総事業費 七千六百六十三万八千円 工期 昭和五十八年～六十二年(予定)	
四、団体管排水施設整備事業 総事業費 三千八百万円 工期 昭和五十七年～五十九年(完)	

改良区の礎を造られた方々

県営天の川災害復旧事務所開所式にて (S29.11.21)



田中利一氏が見えないのはカメラマン…?



天の川合同井堰工事始まる 夏目山より眺む (S29.11)

天の川用水路の今昔

近江町役場西側水路



現在



S 32.11 工事中

長沢線高架水路



現在



S 33.11 工事中

岩脇神社前水路



現在



S 34.12 工事中

下多良水路



現在



S 34.12 工事前

組合員の代表 設立申請人並びに歴代総代の皆さん方

近江町		米原町																町											
能登瀬	多和田	磯	筑摩	朝妻	多良	上良	中良	下良	米原	西番場	東番場	北三吉	南三吉	樋口	河南	枝折	下丹生	上丹生	字名										
古野三郎	古野友三郎	原田秀三	庄司捨造	村川常吉	藤居庄助	田辺孝右門	中川利兵衛	西川幸八	西川伝治	寺村源樹	川合泰三	泉幸太郎		田中鉄治	北村文操	水脇与惣右門	沢清次	沢芳松	沢常吉	能勢真八	相山幹三	相山長之門	竹下茂	前川弥五八	山口吉三郎	山口善一	清水恒市	(設立申請人 29・3・10)	
里本重平	古野友三郎	原田秀三		加藤末吉	藤居庄助	田辺孝右門	中川利兵衛	新井正夫	北村七右門	西川伝治	成宮義一	杉村伝四郎	角田源左	川合泰三	草川太朗		吉川清九郎	古野丹治	北村孫八	田中貞次郎	水脇与惣右門	沢清次	沢常吉	能勢完吾	相山長之門	竹下茂	児玉力雄	山口善一	(第一期総代 30・1・24)
平居寅之助	宮野清助	原田秀三		沢藤次郎	竹中吉三	中川半兵衛	北邨安太郎	田中末治郎	川野俊三	西川吉代茂	成宮義一	角田憲一	角田源左	川合泰三	赤堀多治郎		本田清治	古野丹治	北村次郎	田中貞次郎	水脇与惣右門	吉田安吉	鹿取定光	北川林四郎	土居元衛	相山長之門	山口吉三郎	山口善一	(第二期総代 34・1・30)
平居寅之助	里本重平	古野太郎		川崎武次	藤居平四郎	藤居栄一	北邨安太郎	田中末治郎	飛戸増造	北村七右門	成宮義一	角田憲一	角田源一	川合泰三	村上源弥		本田清治	古野丹治	水脇与惣右門	岩崎宇一	山根伝太夫	沢留治郎	吉田安吉	山口多朗	北川林四郎	土居元衛	山口吉三郎	山口善一	(第三期総代 38・1・30)
天川清八	里本重平	古野太郎		堀部久夫	川崎芳蔵	田辺利次	中川信一	荒尾信一	田中末治郎	飛戸増造	北村七右門	角田久雄	土居嘉明	竹林源一	川合泰三		中島由雄	古野丹治	田中徳三郎	岩崎宇一	山根伝太夫	鹿取文一	沢清次	前川久	北川林四郎	土居元衛	山口吉三郎	西川健次郎	(第四期総代 42・1・30)
広瀬忠一	古野七郎	粕淵千八		椋田圭市	川崎芳蔵	田辺昭男	藤居正太郎	吉田正治	田中末治郎	飛戸増造	中川柳次	角田久雄	土居嘉明	角田勇	竹林源一		中島由雄	山川秀雄	田中徳三郎	北村孫八	山根伝太夫	沢久好	沢正雄	土居四朗	相山幹三	和政一	山口吉三郎	西川健次郎	(第五期総代 46・1・13)
広瀬忠一	古野七郎	北川佐助		椋田圭市	川崎芳蔵	藤居正明	藤居庄太郎	河瀬義一	吉田正信	川森徳右門	飛戸増造	中川柳次	藤本孝三	角田敏雄	角田勇	竹林源一		富田正美	山川義雄	谷田芳男	田中徳三郎	山根伝太夫	沢正雄	沢良吉	土居四朗	相山幹三	山口吉三郎	山口勇	(第六期総代 50・2・4)
広瀬忠一	古野七郎	堀源助		椋田圭市	藤居正明	竹中敏男	吉田正信	田中健兒	北川千秋	北村千秋	藤本孝三	藤本孝三	角田敏雄	角田勇	竹林源一		酒井源一	内山正一	富田綱雄	白石宇一郎	田中真治	北村真治	沢久好	土居四朗	相山幹三	山口吉三郎	山田菊美	(第七期総代 54・3・5)	
広瀬忠一	古野七郎	堀源助		椋田圭市	真野善八	竹中敏和	河瀬駒次	川森光男	北川健兒	磯崎実	藤本孝三	田辺孝夫	竹林源一	酒井源一	内山正一	富田正美	田辺勘一	田中真治	田中真治	田中真治	田中真治	田中真治	沢正雄	北村満夫	北村満夫	辻輝男	辻輝男	(第八期総代 58・3・3)	

(理事)

歴代理事・監事の皆さん方

近江町										米原町										町			
顔戸	高溝	舟崎	岩脇	西円寺	箕浦	新庄	寺倉	日光寺	能登瀬	員外	磯	筑摩	朝妻	多良	上多良	中多良	下多良	番場	樋口	河南	枝折	字名	
須藤正	粕淵真一	田口勇一	山村正太郎	仁科軍次郎	中山英三	山田勝蔵	音居猪平		吉野重治郎			田邊孝右門	中川利兵衛		西川伝治	杉村伝四郎			北村文操	沢芳松	能瀬真八	第1期 30.2.4 32.3.3	
須藤正	粕淵真一	田口勇一	山村正太郎	仁科軍次郎	中山利一	堤長三	音居猪平		吉野友三郎			田邊孝右門	中川利兵衛		西川伝治	杉村伝四郎			北村文操	沢直一	竹下茂	第2期 32.4.6 34.11.12	
須藤正	粕淵真一	田口勇一	山脇源平	小路好古	浜寄重久	前川重吉	音居猪平		吉野友三郎			田邊孝右門	古川源衛		西川伝治		角田源左		北村文操	沢直一	竹下茂	第3期 34.11.13 36.5.9	
須藤正	粕淵真一	田口勇一	山脇源平	児玉源治	浜寄重久	松居安平	広田宗一		吉野友三郎		堀北竹雄	田邊孝右門	古川源衛		吉沢弘三		角田源左		西村茂樹	沢直一	竹下茂	第4期 36.5.9 38.6.1	
須藤正	粕淵真一	田口勇一	山脇源平	児玉賢龍	浜寄重久	川島信一	音居敬造		吉野友三郎		堀北竹雄	竹中惣治郎	古川源衛			土肥嘉明	角田源左		山田武一	沢直一	竹下茂	第5期 38.6.2 40.3.31	
粕淵庄一	粕淵真一	田口勇一	山脇源平	仁科正彦	浜寄重久	前川徳平	音居敬造		平居寅之助		堀北竹雄	中川孝次	古川源衛		北村千秋	土肥嘉明	角田源左		山田武一	沢留治郎	竹下茂	第6期 40.4.2 42.4.5	
須藤正	粕淵真一	田口勇一	山脇源平	仁科己代治	浜寄重久	上田又蔵	広田賢一		平居寅之助		堀北竹雄	竹中吉三	荒尾信一		北村千秋	角田憲一	角田源左		山田武一	沢清次	竹下茂	第7期 42.3.30 44.3.29	
森辰二	粕淵真一	田口勇一	山脇源平	児玉光蔵	浜寄重久	北川一男	音居俊一		平居寅之助		堀北竹雄	竹中吉三	北村光太郎		北村千秋	角田憲一	角田源左		加田建治郎	沢清次	竹下茂	第8期 44.4.6 46.3.29	
中川源次	粕淵真一	田口勇一	山脇源平	丹下久治郎	浜寄重久	山路捨三	音居俊一		村居利一			竹中吉三	北村光太郎		村口太右門	成宮一男	川合泰三		樋口定男	沢正雄	竹下茂	第9期 46.3.30 48.3.29	
中川源次	粕淵真一	田口勇一	山脇源平	松岡政信	浜寄重久	前川八郎	音居俊一		吉野七郎	古沢与門		竹中吉三	河瀬駒次		村口太右門	成宮一男	川合泰三		樋口定男	沢久好	竹下茂	第10期 48.4.6 50.3.31	
中川源次	粕淵真一	田口勇一	山脇源平	仁科清一	浜寄重久	小竹三郎	音居俊一		浅見要次	古沢与門	山川茂	竹中吉三	吉田正治		村口太右門	角田久雄	谷利昇		樋口定男	沢久好	竹下茂	第11期 50.1.6 52.3.31	
田中教一	粕淵真一	田口勇一	山脇源平	小路外吉	浜寄重久	小竹三郎	音居俊一		浅見要次	丸岡寅蔵	藤林長次郎	竹中吉三	中川初男		中川源右門	角田久雄	谷利昇		樋口定男	沢正雄	竹下茂	第12期 52.4.1 54.3.31	
田中教一	粕淵源次郎	田口勇一	山脇源平	丹下久治郎	浜寄礼夫	小竹三郎	広田辰二郎	大林悟	浅見要次	山川茂	前川三次	竹中吉三	中川初男		中川源右門	角田久雄	久保田孝之助		樋口定男	沢正雄	竹下茂	第13期 54.4.1 56.3.31	
田中教一	粕淵源次郎	藤田仙之丈	中川勇	広田信男	浜寄礼夫	小竹三郎	広田辰二郎	大林悟	浅見要次	山川茂		竹中吉三		田中勉	中川源右門	成宮一男	角田久雄	角田勇	安藤正幸	樋口定男	沢久好	土居四朗	第14期 56.4.1 60.3.31

近 江 町					米 原 町									
世 継	宇 賀 野	長 沢	新 庄	能 登 瀬	多 和 田	磯	筑 摩	朝 妻	上 多 良	中 多 良	下 多 良	北 三 吉	南 三 吉	下 丹 生
北村 山弥					庄司 捨造						角田 源左		古野宗治郎	田口 貞蔵
北村 山弥					原田 秀三	庄司 捨蔵					角田 源左		古野宗治郎	田口 貞蔵
北村 山弥					原田 秀三						角田 義汎		古野宗治郎	田口 貞蔵
北村 山弥					原田 秀三						角田 義汎		古野宗治郎	田口 貞蔵
北村 山弥					原田 秀三				古沢 弘三				古野宗治郎	田口 貞蔵
北村 山弥					原田 秀三			荒尾 信一	古沢 弘三				田辺 勘次	田口 貞蔵
北村 山弥	増田 正隆				里本 重平	原田 秀三	竹中 吉三	荒尾 信一					川井 一雄	田口 貞蔵
	木村 孫一郎	竹中 伊八			里本 重平	堀北 竹雄	竹中 吉三						山岡 半助	田口 貞蔵
	木村 孫一郎	須戸 光与司			里本 重平	堀北 竹雄							山下 喜之助	田口 貞蔵
	木村 孫一郎	須戸 光与司			堀北 竹雄	堀北 竹雄							田中 清一	田口 貞蔵
	戸田 善八	須戸 光与司			堀北 竹雄	堀北 竹雄							筑 敬造	田口 貞蔵
	戸田 善八	宮野 清作			堀北 竹雄	堀北 竹雄				角山 久雄			山脇 敬造	田口 貞蔵
	出中 善吾	宮野 清作								角山 久雄	谷利 昇		山脇 利男	山口 馨
	出中 善吾	庄司 利八									谷利 昇		田中源太郎	山口 馨
	粕淵 光夫	北川 勝三						吉田 正治	中川 初男				森崎 藤吉	田口 一郎

(監 事)

長 浜 市	近 江 町							
加 小 員 世 飯 宇 長 顔	田 小 員 世 飯 宇 長 顔	今 一 外 継 飯 賀 沢 戸	今 一 外 継 飯 賀 沢 戸	今 一 外 継 飯 賀 沢 戸	今 一 外 継 飯 賀 沢 戸			
			福居佐太郎	世森柴治郎	日比善太郎	三田村伝八	福井 良雄	岸本徳治郎
			福居佐太郎	世森柴治郎	日比善太郎	藤井喜兵衛	北沢 繁尾	岸本徳治郎
			福居佐太郎	世森柴治郎	山村 寛二	北村 輝雄	高橋 英一	須戸 源陸
茂森字石之門			福居佐太郎	世森柴治郎	山村 寛二	北村新太郎	北沢 繁尾	須戸 源陸
茂森字石之門			福居佐太郎	世森柴治郎	山村 寛二	北村新太郎	北沢 繁尾	須戸 源陸
茂森字石之門			福居佐太郎	世森柴治郎	山村 寛二	北村新太郎	北沢 繁尾	須戸 源陸
茂森字石之門			福居佐太郎	世森柴治郎	吉田 敬磨	北村新太郎	北沢 繁尾	粕淵 庄一
			北村由太郎	世森柴治郎	吉田 敬磨	田中源次郎	北沢 繁尾	須藤 正
茂森字石之門			福居庄太夫	世森柴治郎	吉田 敬磨	北村新太郎	北沢 繁尾	須藤 正
茂森字石之門	久保田藤助	福居庄太夫	世森柴治郎	吉田 敬磨	北村新太郎	北沢 繁尾	北沢 繁尾	森 辰二
池野 伝吉	世森清重	久保田藤助	福居庄太夫	世森柴治郎	富崎 大	谷村礼之介	北沢 繁尾	坂東 羊三
池野 伝吉	久保田藤助	前川 善彦	世森与喜雄	世森柴治郎	富崎 大	谷村礼之介	北沢 善雄	中川 源次
池野 伝吉	前川 善彦			世森柴治郎	山村 惣八	戸田善太郎	北沢 善雄	
池野 伝吉	前川 善彦			世森柴治郎	日比 繁一	戸田善太郎	北沢 善雄	

歴代理事長



第3代～第9代
(S 34.11～48.3)
故
柏 淵 貞 一



初代・第2代
(S 30. 3～34.11)
故
岸 本 徳 治 郎



第 11 代
(S 49. 4～50.7)
久 保 田 藤 助



第10代・第15代
(S 48. 4～49.3)
(S 56. 4～56.7)
世 森 柴 治 郎



第 16 代
(S 56. 8～56.10)
前 川 善 彦



第12代～第14代
(S 50. 8～56. 3)
山 脇 源 平

現管理職

現 職 監 事

事務局長	監 事	監 事	監 事	監 事	代表監事
					
宮 部 昌 之	多 和 田 北 川 勝 三	朝 妻 吉 田 正 治	北 三 吉 森 崎 藤 吉	下 丹 生 田 口 一 郎	宇 賀 野 柏 淵 光 夫

現 職 理 事

<p>理 事 工事委員長</p>  <p>宇賀野 戸田善太郎</p>	<p>理 事 庶務会計委員長</p>  <p>樋口 樋口定男</p>	<p>筆頭理事 用排水委員長</p>  <p>河 南 沢 久好</p>	<p>理 事 長</p>  <p>飯 日比繁一</p>	<p>員外理事</p>  <p>米原町長 山川 茂</p>	<p>員外理事</p>  <p>近江町長 前川 善彦</p>
<p>理 事 庶務会計委員</p>  <p>枝 折 土居 四朗</p>	<p>理 事 庶務会計委員</p>  <p>西 門 寺 広田 信男</p>	<p>理 事 庶務会計委員</p>  <p>岩 脇 中田 勇</p>	<p>理 事 庶務会計委員</p>  <p>箕 浦 浜寄 礼夫</p>	<p>理 事 庶務会計委員</p>  <p>舟 崎 藤田 仙之丈</p>	<p>理 事 庶務会計副委員長</p>  <p>日 光 寺 大林 悟</p>
<p>理 事 用排水委員</p>  <p>下 多 良 角田 勇</p>	<p>理 事 用排水委員</p>  <p>筑 摩 竹中 吉三</p>	<p>理 事 用排水委員</p>  <p>顔 戸 田中 教一</p>	<p>理 事 用排水委員</p>  <p>高 溝 粕淵 源次郎</p>	<p>理 事 用排水委員</p>  <p>寺 倉 広田 辰二郎</p>	<p>理 事 用排水副委員長</p>  <p>能 登 瀬 浅見 要次</p>
<p>理 事 工事委員</p>  <p>中 多 良 成宮 一男</p>	<p>理 事 工事委員</p>  <p>上 多 良 中川 源右工門</p>	<p>理 事 工事委員</p>  <p>多 良 田中 勉</p>	<p>理 事 工事委員</p>  <p>長 沢 北沢 善雄</p>	<p>理 事 工事委員</p>  <p>世 継 世森 柴治郎</p>	<p>理 事 工事副委員長</p>  <p>新 庄 小竹 三郎</p>

全国表彰

銅章・銀章に輝く

天の川沿岸土地改良区



第19回全国大会にて(53.3.25)



第9回全国大会にて(43.5.25)

年度	員数	職 員 氏 名
S 29~30	1	森 源之丞
S 31	5	森 源之丞 北村 順孝 夏原 千代 北沢小三良 高田 二郎
S 32~35	6	森 源之丞 北村 順孝 夏原 千代 北沢小三良 高田 二郎 中川 利重
S 36	6	森 源之丞 北村 順孝 夏原 千代 北沢小三良 高田 二郎 羽淵 利明
S 37	4	森 源之丞 (北村) 藤本 順孝 夏原 千代 羽淵 利明
S 38	5	森 源之丞 藤本 順孝 夏原 千代 羽淵 利明 北村善治郎
S 39~43	4	森 源之丞 藤本 順孝 夏原 千代 北村善治郎
S 44~46	3	藤本 順孝 (夏原) 領家 千代 北村善治郎
S 47~48	3	藤本 順孝 領家 千代 田口 才次
S 49~51	4	藤本 順孝 領家 千代 田口 才次 山田 照子
S 52	5	藤本 順孝 領家 千代 田口 才次 山田 照子 喜田与四秋
S 53	4	藤本 順孝 田口 才次 山田 照子 喜田与四秋
S 54	5	藤本 順孝 田口 才次 山田 照子 喜田与四秋 北村 剛
S 55	6	藤本 順孝 田口 才次 山田 照子 喜田与四秋 北村 剛 大沢 勝洋
S 56	5	藤本 順孝 田口 才次 山田 照子 喜田与四秋 大沢 勝洋
S 57	12	宮部 昌之博 藤本 順孝 藤本 木村 中川喜美夫 田口 才次 山田 照子 喜田与四秋 須戸美智子 北村 八重野 北村 開子 須戸美智子 山川 弘子
S 58	12	宮部 昌之博 藤本 順孝 藤本 山口 中川喜美夫 田口 才次 山田 照子 喜田与四秋 須戸美智子 北村 開子 須戸美智子 山川 弘子 西村 恵子
S 59	11	宮部 昌之博 山口 順孝 藤本 須戸 中川喜美夫 田口 才次 山田 照子 藤本 博 山口 英明 須戸 秀起 北村 開子 須戸美智子 山川 弘子

事務局職員三十年の移り替り

編集後記

昭和五十九年度も中盤を迎え、県営のかん排事業は、湖中の取水施設や、導水路工事の真最中。また、ほ場整備は宇賀野・朝妻筑摩の夏季施行も天候に恵まれて順調に進み、近く冬季施行に取りかかる段階にきています。

一方、団体営の右岸幹線水路は、当初の三ヶ年計画を一年縮め、今年度中に全線完了をめざし、予算の獲得、地元説明並びに、実施設計等をすべて終え、近く入札の運びにこぎつきました。

なお、懸案の世継工区は、今年度こそ是非着工を……と、また、長沢工区は事業実行体制の早期確立を……と、更には、新規の天の川東部地区の計画説明等々、毎晩のように地権者との膝つき合せての話し合いに、各地元に向き、加えて三十周年記念行事や、臨時総代会の準備、その他もろもろで腰の落ち着く暇もない今日この頃です。

このような中で編集で、果してご満足いただけるものになるかどうか心配です。しかし、倉庫の奥から設立当時の文書やアルバム等を引き取り出し、また先輩諸氏のご教示を受けて曲りなりにもまとめることが出来ました。

改良区三十年の歩みを聊かでも偲んでいただければ幸いです。

(宮部記)